

洪水と人々の暮らし ～語り部としての埋蔵文化財～



原口 強：東北大学国際災害科学研究所 特任教授
中央大学機構教授・大阪公立大学客員准教授・(株)STORY代表取締役

概要

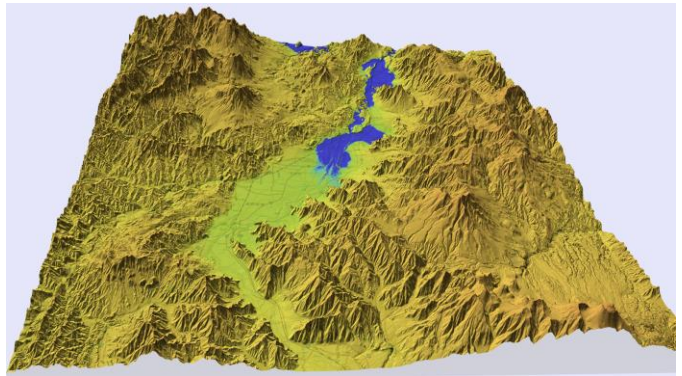
洪水は人々の暮らしに災害を与える一方、氾濫域には恩恵をももたらす。最も著名なものが、エジプトのナイル川流域である。ナイル川の洪水は上流より肥沃な土壌を毎年ナイル河畔にもたらし、エジプトの豊かな農業生産を支えていた。この洪水の影響を調整するための技術が発達し、世界最古の文明であるエジプト文明が成立した。

現地では今でも砂漠に埋もれた遺物や遺構が発見され、その度に世界の注目を集めている。掘り起こされた遺物や遺構（埋蔵文化財）の地道な研究によって、人々の暮らしや技術、さらに知性や感情までも伺い知ることができる。まさに本物だけが持つ「語り部としての埋蔵文化財」のレゾナントル「存在意義」がここにある。

本講演では、海外の調査の事例（アンコール文明、古代アメリカ文明等々）などについても触れた上で、千曲川の地形の成立と洪水災害と人々の暮らし、その語り部としての埋蔵文化財の意義について考えてみたい。

内容

- 自己紹介・国内外での野外調査
 - 地層から読み解く古環境：地震、津波、洪水、等々
 - C14年代軸の世界標準となった水月湖年縞
 - 樹林に覆われた遺構を可視化
 - アンコール文明、メキシコ・ Cholula 遺跡、等々
 - 地層や地形の可視化と画像診断
- 洪水と埋蔵文化財
 - 2019年千曲川水害
 - 長沼城跡と決壊の原因
 - 千曲川沿いの河川地形
 - 「戌の満水」
- 語り部としての埋蔵文化財の意義
- 上高地の成立を踏まえた
河床上昇緩和戦略（オプション）



石標が伝える洪水と人々の暮らし知恵



石標は、長野市小島・柳原遺跡群を横断する市道柳原 117 号線の脇に建てられていたもので、『長野市誌第8巻』にも由来が記載されている。この市道は、善光寺往来道とも呼ばれ、長らく堤防としても利用され、自然溢水させることにより水害の集中を避けてきた。大正年間に建てられたこの石標は、刻まれた水平線より高い工作物等を設置しないことが取り決められており、現在も道路はこの水平線を超えないように維持されてきた。

・・・考古学の手法によって、現代と近代を記録によって結びつけることができる事例である。（長野県立歴史館 石丸敦史）

石碑に描かれた二本の線は、堤防の高さがこの間より高くてもいけないし、低くてもいけないことを意味する。（川崎保氏：長野県埋文センター）

➡堤防を敢えて低くすることで通常の洪水から地域を護り、異常時は越水を許容し氾濫を広域で受け入れることで壊滅的被害を軽減する治水。自然を正しく観察し、具体的な処方を行った物証。：原口の解釈